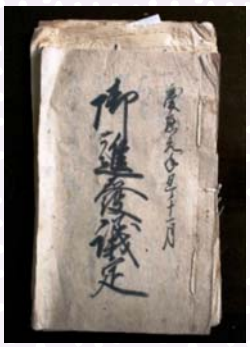
2013年9月号 第103号 毎月1日発行

シリーズ 第40回

小瀬直一郎と倉敷浅尾騒動①

嘉永六年（一八五三）、ペリー率いる黒船の来航をきっかけに、国内は幕末の動乱期に突入しました。外圧に対する警戒の必要性が高まると、これまで武士階級のみに許されていた武芸が農民にも奨励されていきます。津山藩でも黒船来航の翌年には藩内の大庄屋に対して、槍・剣・砲術その他武芸をたしなむべきことを命じています。そして、こうしたことをきっかけに、農民達も藩や幕府の命令による軍事夫役に出役するようになり、その後「農兵」として組織化されていくことになります。

さて、この当時香々美川流域の、寺和田村より上流は幕府の領地で、備中倉敷代官所（現倉敷市）の管轄地でした。倉敷代官所でも、付近の幕府領の村々から警備の名目で農民を集め、交代で武術の稽古を行い、農兵の組織化を図っていたようです。そして代官所から遠く離れた美作の幕府領でも、村役人らが中心となり、武術を学ぶ動きがみられます。



「御進発議定」慶応元年

美作の幕府領の惣代庄屋が、第二次長州戦争にあたって、人足や賃金・衣類などの取り決めをまとめたもの（「小鴨家文書」）

町内に残る古文書には、西北条郡の寺和田村以北の村々の有志が武術を学んでいた記録が残されています。これによれば、農繁期以外の毎月八・十八・二十八日に寺和田村と井村分で剣術の稽古を行う取り決めがされています。指導者は、津山藩に伝わる剣術の流派「初実剣理方一流」今泉南八の門人で新野山形村（現津山市）の安東源治で、寺和田村庄屋・小瀬直一郎や百谷村庄屋・久安嶋太郎らが中心となり、併せて砲術の稽古も行われていました。

このように、山間部の村落へも幕末の動乱が波及していく中で、元治元年（一八六四）と慶応元年（一八六五）の第一次・第二次長州戦争では、倉敷代官所は、幕府から食料や燃料などの物資の確保や、それらを運搬する人足の用意、幕府役人の食事の世話などを命じられており、管轄下の村々からも物資の徴収や、人足の動員が行われました。その人足を指図する手代下役は村の庄屋が勤め、交代で派遣されましたが、小瀬直一郎も慶応二年（一八六六）二月十一日から三月七日まで広島に赴き、現地で手代下役を拝命しています。

そして直一郎が役目を終え、広島から帰村して一ケ月余り後の四月十日未明、立石孫一郎という人物が率いる、長州の第二奇兵隊の脱走部隊一〇〇余名が倉敷陣屋を襲撃、主要な建物を焼き払い、死者十名の犠牲を出しました。続いて、十二日夕方には備中浅尾藩（藩主・蒔田相模守広孝）の陣屋（現総社市）を襲撃し、建物を焼き払い、陣屋を占拠するという事件が起こります（倉敷浅尾騒動）。

倉敷代官所跡（倉敷アイビースクエア内）

直一郎は、十日の夜に倉敷陣屋襲撃の報をいち早く耳にすると、美作の幕府領の村人を集め、御役所警護の名目で倉敷に駆けつけるため、紺の割羽織・襠高袴を身につけ、長刀を差し、約二〇〇名を率いて十二日朝に美作を出発しました。剣術指導をしていた安東源治は前日に先発しています。

村の庄屋であった直一郎も、第二次長州戦争の最前線の様子を見聞し、日頃の稽古によって武術の腕も上がるにつれ、武士のような志や正義感が芽生えてきたのかもしれません。

浅尾陣屋跡に残る当時の土塀

参考資料：
『鏡野町史』史料編・通史編、
『岡山県史』近世Ⅳ・津山藩文書、
『倉敷浅尾騒動記』

生涯学習課　日下
電話（0868）54-7733

〒708-0392 岡山県苫田郡鏡野町竹田660 鏡野町くらし安全課 TEL0868-54-2780
【鏡野町のホームページアドレス】http://www.town.kagamino.lg.jp/